

序章

一九九四年末に、フランス南部で発見されたシヨヴェ洞窟の彩色壁画は、さまざまな動物を、きわめて洗練された筆致で描き出している (Chauvet, Deschamps & Hillaire, 1996)。最近、それがおそらく三万年ほど前のものであることが、放射性炭素年代測定法によって正式に確認された (Valladas, *et al.*, 2001)。これまで知られていた、やはりフランス南西部のラスコー洞窟にある壁画は、一万八千年前に描かれたと言われているし、スペイン北部にあるアルタミラの洞窟壁画は、一万三、四千年前のものとされる。したがって、シヨヴェ洞窟の壁画は、ラスコーの壁画よりもさらに一万年以上に描かれたことになるが、技法や洗練度においては、両者の間に大きな差はない。それどころか、見かたによつては、シヨヴェ洞窟壁画のほうが優れているとさえ言える。その後、ドイツ南部のホーレ岩窟からも、やはり三万年から三万三千年ほど前にマンモスの牙で作られた、小さな彫刻が三点見つかっている (Conard, 2003)。これらも、かなり高度なものに見える。

ホモ・サピエンス・サピエンスと呼ばれる現生人類が登場した時期については諸説があるが、シヨヴェ洞窟の壁画やホーレ岩窟の彫刻が本当に三万年前のものであれば、ごく初期の現生人類

による作品の可能性がある。それらがどのような目的で作られたにせよ、その当時の人類に、現在のわれわれと共通する感性や美意識や描写力が備わっていたのはまちがいない。これまでの定説とは違って、人間の感性や能力は、徐々に進歩してきたのではないのかもしれない。

本書で展開されるのは、従来のもとは根本的に異なる人間観である。私が独自に開発した心理療法の視点に立つと、人間に対する見かたがまったく違ってくることは、これまでも何度か述べてきた。しかしながら、その内容に言及したことはほとんどなかった。私の人間観では、意識は、その大部分が、自らの本性や能力を覆い隠すための手段と見なされる。ひとこと言えば、心の実在を基盤として、無意識に視点を置いた人間観ということになるか。それに対して、従来の人間観は、脳を基盤として、意識に視点を置いたものと言える。それによれば、人間は、天文学的な時間をかけた進化の末、ようやく明瞭な意識や知性を手にしたにもかかわらず、自らの性悪な（原始的）欲求や感情に翻弄されるばかりか、自らが置かれた環境にも大きく翻弄される、痛々しいほど脆弱な存在であるとされる。

本書の第1部では、私の人間観の概略を示したうえで、長年、心因性疾患全般の心理療法を専門としてきた人間が、かくも奇妙な人間観を持つようになった経緯について述べる。最初は精神分裂病（昨今の用語では、統合失調症^{シュイ}）を、その後は主として心身症を対象にして心理療法を続ける中で、反応および抵抗という現象が確認された。それと並行して、無意識というものが、精神分析で言われてきたものとはまったく異なっていることがわかってきた。そして、反応という明確な手がかりをどこまでも追いつけた結果、心因性疾患のあるなしにかかわらず、人間には誰にで

も、反応や抵抗の起こることが次第に明らかになったのである。そうすると、異常と正常を切り分けることは、容易にはできないことになる。

第2部では、現在の私の人間観や理論の全体像を描き出そうとしたが、紙幅の関係もあって、必ずしもそれに成功したとは言えないかもしれない。とはいえ、私の長年の研究テーマである、幸福否定という、人間全般に見られる（本能的とも言うべき）このうえなく強い意志と、その裏に見え隠れする人間の本质については、さまざまな角度から、具体例を掲げながら、ある程度の紙幅を割いて説明することができた。また、無意識の重要性や、生きた心を扱うことの重要性についても、その中で、自然におわかりいただけるはずである。

ところで、心が脳とは別に実在することになると、人間を対象とした科学分野は、当然のことながら大きな影響を受ける。その代表格は、物理現象を基盤とした脳研究であり、“偶然”を基盤に推測が重ねられている、現行の進化論であろう。^{〔註2〕}ネオダーウィニズム（総合説進化論）と呼ばれるその進化論によれば、人間は、原始的な単細胞生物から、突然変異と自然選択によって、とてつもなく長い時間をかけて、徐々に進化してきたことになっている。しかし、こうした進化論では、肉体の進化しか考慮されておらず、（その立場からは当然のことになるが）心の進化は問題にされていない。現在の科学知識によれば、そうした進化によつて得られた人間の脳は、単なる精密機械（いわば“自己増殖型自動機械”）にすぎず、それを操る主体も、脳内のどこかに局在することになっている。そして、そのような考えかたこそが“科学的”とされ、心の独立的実在を唱えれば、それだけで、自動的に“宗教”の仲間入りを宣告されるか、さもなければ完全に

無視されるのである。

専門家といえども、すべて専門家の立場で発言するわけではない。理論の根幹にかかわる部分では、専門家の中の非専門家がいつのまにか顔を出し、当の本人も意識で気づかないまま、専門家の顔をして発言してしまうことがある。そのような現象は、心が関係する領域で、特に際立っている。科学的方法を使って得られた、客観的な観察事実から発言できる範囲に自らを留めることができず、私の言う（幸福に対する）抵抗のため、そこにむりやり個人的“解釈”を割り込ませてしまうのである。その抵抗は、ほとんどの者で共通しているため、分野によっては、理論（定説）全体が、一種の共同妄想と化してしまう。そのため、基本的骨格が没論理的論証で構築されているにもかかわらず、その自覚を完全に欠くという、精神病的な妄想と同じ構造が観察されることになる。

八年ほど前に刊行した、唯物論の幻想を扱った拙著（笠原、一九九五年）の中で、私は、人間が関係する科学分野は、心の实在の否定を暗黙の大前提にして成立していることを指摘しておいた。その点で、本書は、その続編と言える。ただし、前著では、人間の隠された能力を中心に扱ったのに対して、今回は、主として、人間の隠された人格的側面に焦点が絞られている。その際、組上に載せるのは、長年、私がかかわってきた精神分裂病の原因論に対する専門家の姿勢である。その理由については、本書を読み進むにつれて、自然におわかりいただけることであろう。

本書で展開される、従来の“定説”とは根本から異なる主張に対しては、さまざまな反論が出されることであろう。しかし、現行の科学知識に基づいて批判を行なう前に、本書の主張の妥当

性を、各人に可能な範囲で、実際に検証してみることをお勧めしたい。専門家でなくとも、実生活の中で起こる現象について、あるいは本書で紹介される現象について、本書で提示される方法に従って検討し、本書で主張されている通りの結果が得られるかどうかを、ぜひとも見極めていただきたいと思います。

そのことにも関連するが、本書に書かれている内容は、無意識的な強い抵抗を生みやすい。そのため、いわゆる説得力を欠くことに加えて、複雑なことを言っているわけではないにもかかわらず、何度読んでも頭に入っていない箇所が、随所に見られるかもしれない。そのような部分を繰り返し読もうとすると、私の言う（後述する）反応が出るであろう。このように、反応が出現するという現象自体が、私の言う抵抗が実在することの裏づけになるわけである。したがって、反応が起こる箇所にこそ、重要な意味が隠されていると考えていただければ、本書の存在意義が理解しやすくなるであろう。本書に綴り出されている物語が、少数例から私が強引に引き出した机上の空論であり、根拠を欠いた単なる妄想にすぎないのか、あるいは、私が主張するように、一般化が可能な真性の現象なのかについては、読者の方々が、反応や抵抗を自分で経験することによって、自分の目でじかに確認していただきたいと思う。

ここで、二、三のお断りをおこななければならない。ひとつは、本書は専門書ではないため、本来なら留保を付すべきところでも、煩雑になるのを避けて、少々断定的な書きかたをしている箇所が少なからずあることであり、もうひとつは、紙幅の関係もあって、論証や説明が不十分な箇所が多いことである。また、一部の疾患、特に精神分裂病については、それを持つ人たちに特

有の性格傾向や生きかたが観察されるため、そうした特徴を、できる限り客観的に描写するよう努めたが、その描写は、かなり辛辣に感じられるかもしれない。もとより、それは、そうした疾患を持つ方々を揶揄^やしたためでもなければ、批判したためでもない。何よりも肝心なのは、政治的な思惑や運動ではなく、事実を明らかにすることであり、さらには、それを通して、真の意味で効果的な対処法や治療法を探り当てることであろう。そのためには、より精密な観察事実を正確に記述する必要があるのである。とはいえ、本書で述べられるのは、あくまで、一部の私たちの観察から生まれた私見にすぎないので、それに対して異論があれば、それを否定する根拠を明示したうえで反論してくださることを切に願う。

最後になったが、従来の治療者・被治療者関係とは多少なりとも異なる、いわば共同研究者的な立場から、長年にわたって、私の心理療法におつき合いくださった方々に、この場を借りて深く感謝したい。二〇年以上になる数名を筆頭に、一〇年以上の方が三五名ほどにもなる、ふつうの心理療法では、とうてい考えられないほどの長期間にわたって心理療法を続けてこられた方々の熱意がなかったら、私の治療理論であれ人間観であれ、進展することがなかったのはまちがいない。

二〇〇三年二月